

# 何としても大好きな 女川の復興に尽くしたい

女川町臨時職員・  
東北大学大学院生

神山 梓

さん

創価大学工学部卒業

「学生のための大学」「社会に貢献する大学」を掲げる創価大学は、真の人間教育に力を入れ、地域や人々の役に立ちたいと行動する人材育成に注力しています。卒業生は国際機関をはじめ、経済界、法曹界、教育界など、幅広い分野で活躍しています。

青い空と青い海、北上山地と太平洋が織りなすリアス式海岸が続く。暖流と寒流が交わり、カキやホタテ貝の養殖が盛んな良港、宮城県女川。そんな海岸を3・11東日本大震災が襲った。人口の約一割を失い、町の経済の基盤をすべて奪われた女川町で、復興プロジェクトに参加し、臨時職員として休日返上で奔走している女性がいる。



神山梓さんは、創価大

学卒業後、東北大学大学院の博士課程に在籍し、海洋生物学を研究している。震災当日、自身も女川湾に面した同大学の臨海実習施設で津波に遭遇し、間一髪で助かった。しかし、実験機材、収集した標本、研究データはすべて失った。「深い絶望感に襲われました。でも、ここからどう立ち上がるのかと考えたとき、女川の

復興に尽くしたいという気持ち湧き上がってきました」  
高校時代、東北大の臨海実習に参加して「海の神秘は宇宙の神秘よりも深い」との担当教員の言葉から、「海のことをもっと深く学びたい」と、二〇〇一年、創価大工学部に入学し、生物工学科（現、環境共生工学科）で学ぶ。在学中は勉学のかたわら、学校の

復興が始まったばかりの女川港を背景に

事などの企画運営に学生スタッフとして取り組んだ。  
「試験前は何日も学校に泊まり込み、実験やデータ収集、課外活動にも参加しました。困ったときは先輩が励ましてくれました。仲間と力を合わせることで、他人に尽くすことの大切さを学びました」  
今は、「女川の皆さんが笑顔で暮らせる町をつくること

が目標です。そして大好きな女川の復興に尽くすことが私の使命です」と力強く語る神山さん。臨時職員として、復興計画の策定に携わり、住民の意見をまとめ、行政にフィードバックする。時にクレームの聞き役にもなる。仕事は連日深夜に及び、休日も住民への説明会の運営に汗を流す。  
神山さんを復興活動に駆り立てているのは、大学受験の体験に遡るといえる。  
「大学進学を目前にして、『悩める人、苦しんでいる人、不幸の人の味方になれる人が偉い』という創立者の言葉に出会い、創価大へ行くことと決めました」  
母校の指針「労苦と使命の中にのみ人生の価値は生まれる」が鮮やかに胸によみがえる。博士号取得への思いも変わらない。自分の研究成果を生かし、女川の新生を目指したいと固く誓う日々だ。

かみやま・あずさ／一九八三年福島県生まれ。仙台市で育つ。二〇〇一年創価大学工学部生物工学科入学。〇五年同大卒業。〇六年東北大学大学院博士前期課程（農学研究所資源生物学専攻）入学。〇八年同大大学院博士後期課程（農学研究科資源生物学専攻）進学。現在、同大学院を休学し、宮城県女川町役場に臨時職員として勤務。



Azusa Kamiyama

